

学校歯科治療調査で子どもの貧困が浮き彫りに

- 大阪府内の公立小学校の 46.4%に口腔崩壊の児童が存在。推計で 2000 人以上の小学生が口腔崩壊状態に
- 歯科検診で「要治療」でも小学生の 50.4%が受診できず。背景に貧困と格差の広がり

「子どもの貧困」が大きな社会問題となるなか、大阪府歯科保険医協会は“口から見える子どもの貧困”の実態を調べるため、2015年2月に学校歯科治療調査に取り組み、このほど結果をまとめましたので公表します。

大阪府内の全公立小・中・高等学校(1618校)に調査票を郵送し、319校(19.7%)から回答がありました。



口から見える貧困

口腔崩壊(※)の児童・生徒の有無を尋ねたところ、小学校 46.4%、中学校 35.2%、高校 53.8%で存在していることが分かりました。推計すると府内で 2000 人以上の児童・生徒が口腔崩壊に苦しんでいることとなります。

寄せられた事例では、「歯がないと一目で分かる児童がいる」「6年生で永久歯 12本がむし歯」「高3男子でむし歯 15本。兄弟が多く経済的に苦しい状況」など、深刻な実態が浮き彫りになりました。

医療費補助の対象外

学校歯科検診後の受診状況では、「要治療」と診断されても小学生の 50.4%、中学生の 69.0%、高校生の 86.9%が受診していないことが分かりました。必要な治療が受けられない実態が明らかとなり、学校歯科検診制度の意義が問われる事態となっています。

受診できない背景には、経済状況やネグレクト、塾・部活動優先など、さまざまな事情が伺えました。中学・高校になれば医療費の補助が受けられなくなる自治体も多く、受診率低下の要因の一つになっています。

アンケートに回答した学校の先生からは「まず治療費を何とかしてほしい」との声が複数寄せられ、医療費助成の対象年齢の拡充や自己負担の無料化が求められていることが分かりました。

調査結果の詳細は別紙をご参照ください。

(※) 口腔崩壊……むし歯が十数本あったり、歯がボロボロになったりしている状態のこと